

中宮展示館周辺の自然



2020年3月

石川県白山自然保護センター

はじめに

白山白川郷ホワイトロードの石川県側料金所の手前に中宮展示館（中宮温泉ビジターセンター）があります。周辺にはブナ、ミズナラ、オニグルミ、トチノキなど多様な樹木が生育しており、白山を代表する森林景観を作り出しています。これらの森と急峻な地形と厳しい気象とが合わさった当地は、ツキノワグマ、ニホンカモシカ、ニホンザル、イヌワシやクマタカなどの大型野生鳥獣に豊富な餌資源や生活場所を提供しています。このように、中宮展示館周辺は多様な動植物を観察することができる自然豊かな地域です。

本誌では、この地域で見られる動植物について紹介するとともに、中宮展示館周辺の地形や気象の概要を解説します。観察路を散策したり、展示館前の蛇谷の川で観察する際の一助となるよう、よく見られる生き物を中心に、できるだけ多くの種類を分かりやすく紹介することを心がけました。

また、この周辺で営まれたかつての人々の生活についても触れました。

本誌を通して、この地域を訪れた皆さんが白山の自然に興味を持ち、この地域のすばらしさを少しでも感じていただければ幸いです。



上空から見た中宮展示館

表紙 中宮展示館蛇谷観察路に咲くカタクリ

裏表紙 雪が降った晩秋の中宮展示館

もくじ

中宮展示館周辺図	2
花ごよみ	4
周辺の自然 植物	5
動物	10
地形と気象	15
中宮の自然とともに生きる	18
中宮展示館	20

中宮展示館周辺図



花ごよみ

中宮展示館周辺で見られる植物の花ごよみ ★本誌で紹介している植物

	4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月	
	下旬	上旬	下旬	上旬	下旬	上旬	下旬	上旬	下旬	上旬	下旬	上旬	下旬	上旬	下旬	上旬
キバナイカリソウ																
キクザキイチゲ★																
スマレサイシン																
フデリンドウ★																
カタクリ★																
ニリンソウ★																
ラショウモンカズラ★																
マムシグサ★																
ギンリョウソウ																
ササユリ																
オカトラノオ★																
オオバギボウシ																
クサボタン																
キンミズヒキ																
ハンゴンソウ																
クズ																
オトコエシ																
ソバナ																
ツリフネソウ★																
ススキ																
ミズヒキ																
サワアザミ★																
アキノキリンソウ																
サンインヒキオコシ																
リュウノウギク★																
オオバクロモジ★																
オニグルミ★																
ブナ★																
ヒメウツギ																
タニウツギ																
ヤマツツジ★																
ウツギ																
ミズナラ★																
クリ																
ケナシヤブデマリ																
コマユミ																
ハクウンボク																
サワフタギ																
キハダ★																
エゾアジサイ★																
リョウブ																
クサギ★																

緑字: 草本 茶字: 木本 花の見える時期 実の見える時期(実の目立つ植物)

植物

白山にはブナを中心とする落葉広葉樹林が多く分布しています。中宮展示館周辺にもブナ他、ミズナラ、オニグルミ、トチノキなどの高木から成る森林がみられます。

これらの林では、木々の葉が開いてしまうと日光が地上にあまり届かなくなります。春の早い時期、それらの葉が開く前にカタクリ、キクザキイチゲ、ニリンソウなどの植物が競うように花を咲かせます。これらは春先だけに見られ、その後は葉も含め植物全体が姿を消してしまうため、春のはかなさの象徴として「スプリング・エフェメラル（春の妖精）」とよばれています。これらの植物の後には、初夏のブナ、ミズナラをはじめとした美しい新緑や、秋の木々たちの鮮やかな紅葉など、季節ごとに違った様子を見せてくれます。

中宮展示館周辺で見られる代表的な植物

キクザキイチゲ（キンボウゲ科） 草丈 10～20cm 花 4月下旬～5月上旬



やや暗めの林でよく見られ、観察路や展示館周辺でも普通にみられます。白または紫色の花を1輪だけつけ、早春に咲いています。大きさや形がニリンソウに似ていますが、花びら状のがく片はニリンソウよりも細く、数も多いので簡単に見分けられます。春の終わりには枯れ、夏には植物全体が姿を消してしまいます。

フデリンドウ（リンドウ科） 草丈 5～10cm 花 4月下旬～5月上旬



比較の日当たりのよい場所に育ち、観察路では炭焼き小屋跡やブナ平コースの道端で見られる小さなリンドウです。春早くに、茎の上に青紫色の花が1～数個咲いています。この種類とよく似ているハルリンドウは、根元から生える葉（根生葉）が広がって生えているので区別できます。

カタクリ (ユリ科) 草丈 20cm 花 4月下旬



林の中を中心に観察路全域で多く見られ、春先のわずかな間だけ一斉に桃色の花を咲かせます。葉を含め、カタクリが地上に姿を現しているのは1か月程度で、6月には葉を含め影も形もなくなってしまいます。地下にある茎（鱗茎）はでんぷんを多く含み、昔はここから片栗粉をとっていました。種子にはアリの好む成分が含まれており、アリによって運ばれていきます。

ニリンソウ (キンポウゲ科) 草丈 20～30cm 花 5月



林の中や林の縁に見られ、観察路に多く見られます。春、カタクリの花が終わる頃に白い花が咲きます。1本の茎から2輪の花が出ることが名の由来ですが、時には花が1輪や3輪の場合もあります。花びらのように見えるのはがく片で、普通5枚ですが8枚以上の場合や、がく片が緑色になる個体もあります。

ラショウモンカズラ (シソ科) 草丈 20～30cm 花 5月下旬～6月上旬



林の中に育ち、観察路ではオニグルミ林の中や道路脇で見られます。春の終わり頃、唇型の大きな青紫色の花が2～3個ずつ数段にわたって咲きます。花の形は平安時代の武将、渡辺綱が羅生門で切り落とした鬼女の腕に似ていると言われており、このことから名が付いたそうです。

マムシグサ (サトイモ科) 草丈 50～60cm 花 5月下旬～6月中旬



林内のやや暗い場所に生え、観察路ではオニグルミの林の中で見られます。春の終わりから初夏、苞と呼ばれる部分に包まれた花が咲きます。秋に赤く熟す果実は、トウモロコシの形に似ていますが、果実を含む全体が有毒です。茎のように見える葉柄のまだら模様がマムシに似ていることからこの名が付いたと言われています。



オカトラノオ (サクラソウ科) 草丈 60～100cm 花 6月下旬～7月下旬



日当たりのよい林の縁や草原などの明るい場所に多く、観察路では猿ヶ浄土コースの尾根部やブナ平コースのクルミ林の縁に生育しています。夏に白い小さな花を穂状に多数つけ、下の方から開花していきます。その花穂が虎の尾を連想させることからこの名が付けられました。

ツリフネソウ (ツリフネソウ科) 草丈 40～80cm 花 8月上旬～9月下旬



林内の暗く湿った場所に群生し、展示館周辺でも駐車場の周り、観察路入り口、ブナ平コースなど広い範囲に生育しています。夏から秋に、葉の付け根から柄が出てそこからぶら下がるように赤紫色の花が付き、名前の由来となっています。花の後ろ側の部分は突き出て渦巻の形になっています。

サワアザミ (キク科) 草丈 200cm 花 9月上旬～10月上旬



沢沿いや川のそばなどのやや湿った場所で見られ、展示館周辺では駐車場周辺や観察路入り口で多く見られます。9月上旬から10月上旬にかけて赤紫色の花が咲きます。葉にあるとげは他のアザミに比べて鋭くなく、さらに春に出た頃の葉は柔らかく、山菜として利用されます。展示館周辺にはハクサンアザミも見られます。

リュウノウギク (キク科) 草丈 30～90cm 花 9月下旬～10月上旬



日当たりのよい岩場や崖地などに生え、展示館周辺ではブナ平コース途中のトンネル手前で見られます。秋に外側が白、中央が黄色の花を咲かせます。竜腦という香料に似た香りの油分が含まれていることから名付けられました。展示館周辺ではこの種類ととても似ているイワギクも見られます。

オオバクロモジ (クスノキ科) 木の高さ3～5m 花4月下旬～5月上旬



山地で普通に見られ、観察路の道沿いにも多く生えています。春の早い時期に小枝の節に小さな黄色の花が咲きます。枝や葉にはよい香りがし、薬用として用いられたり、つまようじとして加工されたりします。枝は雪上を歩くための道具である「かんじき」の材料としても使われます。

オニグルミ (クルミ科) 木の高さ5～10m 花5月 実8月上旬～10月上旬



湿り気の多い場所を好み、^{じやだに}蛇谷の河原や観察路に多く生え、林をつくっています。花は5月頃で、雄花は房状に垂れ下がりますが、雌花は穂状で直立した赤い花が咲きます。実は夏の終わりから秋に熟して落ちます。緑色の皮の中に、堅い殻に包まれた栄養価の高い種子が入っており、野生動物の大切な食料となっています。



花

ブナ (ブナ科) 木の高さ10～15m 花5月 実10月



山のゆるやかな斜面で多く生育し、林をつくっています。春、葉が開くのと同時に雄花と雌花が開きます。堅い殻の中に小さな実が2個入っており、秋に熟します。果実は豊作の年と不作の年があります。観察路の猿ヶ浄土コース入口にあるブナ林は平成2～8年にかけて植えられたものです。



花

ヤマツツジ (ツツジ科) 木の高さ3m 花5月下旬～6月中旬



山野の明るめの林の中や林の縁、草原などに生育し、観察路ではブナやミズナラ林に多い低木です。初夏、枝先に紅色の花をたくさん咲かせます。日本の野生ツツジの中では最も分布する地域が広く、ツツジの代表ともいえる種類です。観察路には春の早い時期に花が咲くユキグニミツバツツジも見られます。

ミズナラ (ブナ科) 木の高さ10～20m 花5月 実8月下旬～10月上旬



ブナと同様な環境に生育しますが、やや乾いた場所や明るい場所にも見られ、観察路では広い範囲で林を作っています。ブナと同じで春に葉と同時に雄花と雌花が開花します。夏の終わりから秋にかけて2～3cmのドングリが熟し、ブナ、クリ、オニグルミの



実

キハダ (ミカン科) 木の高さ5～10m 花6月上旬～7月中旬 実10月



山地に生え、中宮では駐車場の周りや林の中で見られます。夏の初めに枝先に小さな緑色の花が咲きます。秋には実が黒く熟し、クマやサルが好んで食べます。幹の表皮の内側に黄色い皮があり、これが名前の由来となっています。この皮を乾かすと黄柏と呼ばれる生薬となり、健胃、整腸剤として用いられます。



実

エゾアジサイ (アジサイ科) 木の高さ1～1.5m 花6月上旬～7月上旬



林の中で普通に見られる低木で、観察路ではミズナラ林内で、梅雨頃に水色の花を咲かせます。花序（^{かじよ}花の集まった部分）の中央部にはおしべとめしべを持つ両性花があり、その周りには3～5枚のがく片が花びら状になった装飾花があります。両性花は実をつけますが、装飾花には実ができません。

クサギ (シソ科) 木の高さ3～5m 花8月上旬～9月上旬 実9月中旬～11月上旬



日当たりのよい林の縁などに育ち、展示館周辺では駐車場の周りで見られる低木です。白い花が枝先の葉の脇から出て、夏から秋の初めにかけて咲きます。その後、緑のがく片は赤く変色し、さらに果実は光沢のある紺色に熟し、その姿が目立つようになります。枝や葉に強い悪臭があるためこの名が付けられました。



実

動物

中宮展示館周辺は、以前は秘境の地と言われ、開発が進んでいませんでした。そのため、手の加わっていない自然が今も多く残り、野生動物の宝庫となっています。ツキノワグマ、ニホンカモシカ、ニホンザルなどの大型哺乳類や、イヌワシやクマタカなどの猛禽類はこの地域を代表する動物と言えるでしょう。蛇谷の溪流ではカワガラス、カジカガエル、ヒダサンショウウオ、イワナなど山地清流に特有の生き物が生息しています。また、林内には、ニホンリス、ヒメネズミ、アカショウビン、オオルリ、モリアオガエルなどの中小型鳥獣のほか、ミヤマクワガタ、ミヤマカラスアゲハ、クサギカメムシなど、山地でよく見られる昆虫が生息しています。



アサギマダラ
春と秋に中宮で見られる
大型のチョウ

中宮展示館周辺で見られる代表的な動物

ツキノワグマ (イヌ目クマ科) 大きさ 120 ~ 180cm



森林に生息しており、この地域では最も大型の動物です。春先の木の葉が開く前には、山の斜面にいる様子が中宮展示館からも双眼鏡などを通して観察できることはありますが、普段は姿を見ることはほとんどありません。観察路ではクマが樹上で花や木の実を食べた時にできるクマ棚や、木に登るときにできた爪痕つめあとなどが見つかります。

ニホンザル (サル目オナガザル科) 大きさ 50 ~ 60cm



森林に生息し、数も多く、この地域で最もよく見られる哺乳類です。20 ~ 30頭の群れで展示館周辺に現れることが多く、特に秋はその姿をよく見かけます。主に木の実などを食べますが、花、種子、きのこなども食べ、さらに秋には展示館の壁かべについたカメムシまで食べている様子が観察できます。

ニホンリス (ネズミ目リス科) 大きさ 20cm



森林に分布し、観察路でもオニグルミ林やミズナラ林に生息していますが、人の気配に敏感で、あまり姿を見ることはありません。特にドングリやクルミなどの種子を好んで食べています。観察路には、リスが食べてきれいに半分からに割れたクルミの殻からが落ちています。ちなみに、穴の開いたクルミはネズミが食べた痕あとです。

ニホンカモシカ (ウシ目ウシ科) 大きさ 100cm



森林に生息していますが、展示館周辺の山地斜面でもよく見られます。草、木の葉、芽、果実など、植物を食べます。「シカ」という名前がついていますが、シカの仲間ではなく、ウシの仲間、1対の短い角が雄にも雌にもあります。角にはしま模様があり、そのしまの数が多いほど、齢をとっています。

アカショウビン (ブッポウソウ目カワセミ科) 大きさ 30cm



初夏に南方から渡来し、その頃から山地森林で見られるようになります。「キョロロロロー…」とよく響く声で鳴き、展示館周辺では5月から6月にかけて、朝方によくその鳴き声が聞こえます。体全体が鮮やかな赤色ですが、案外と林の中に溶け込んで、その姿はなかなか見ることができません。

イヌワシ (タカ目タカ科) 大きさ 80 ~ 90cm



翼を広げると2m近くになり、この地域で最大の鳥です。山地の開けた森林や草原に生息しており、展示館の上空高くを飛んでいる姿が時折観察できます。ウサギ、ヤマドリ、アオダイショウなどの動物を捕まえて食べています。これよりひと回り小さいクマタカも見ることができます。

オオルリ (スズメ目ヒタキ科) 大きさ 15cm



夏に南方から渡ってきて、林内に生息するようになります。展示館周辺では5月下旬から7月下旬まで、ミズナラ林などで比較的良好に見られる鳥です。オスは高い木の枝先で「ピールーリーージジッ…」などと複雑ですが美しい声でさえずっています。オスの背中には光沢のある美しい青色ですが、メスは茶褐色であり目立ちません。

ヤマカガシ (有隣目ナミヘビ科) 大きさ 60 ~ 120cm



人里から山地までのさまざまな環境に生息し、白山麓でも多く見られるヘビの一つです。展示館周辺では建物の周りや林の縁で春から秋にかけて見られ、主にカエルを食べています。比較的小となしいヘビですが、上あごの奥歯に毒牙を持っているので、むやみに近づいたり、触ったりしないようにしましょう。

ニホンカナヘビ (有隣目カナヘビ科) 大きさ 15 ~ 25cm



草原や森林、河原などのさまざまな環境に生息している爬虫類で、展示館周辺では駐車場の脇や林の縁、林内などでよく見られます。光沢のないかさついた体をしていて尾が長いのが特徴です。ニホントカゲとよく似ていますが、ニホントカゲはつやのある滑らかな体をしているので区別できます。

カジカガエル (無尾目アオガエル科) 大きさ 4 ~ 7cm



溪流にすむカエルで、蛇谷では6月から8月にかけて鳴き声を聞いたり姿を見たりできます。オスは石の上で「フィー、フィ、フィ…」と美しい声で鳴きます。卵は石の下などに産み付けられ、オタマジャクシは川の流れに流されないよう、吸盤状の口をしています。蛇谷にはこれより大型のナガレヒキガエルもいます。

モリアオガエル (無尾目アオガエル科) 大きさ 4 ~ 8cm



普段は森林に生息していますが、展示館周辺では5月下旬から6月に産卵のため駐車場の周りなどで見られるようになります。水面にせり出した木の枝などに泡で包まれた卵塊を産みつけ、生まれ出たオタマジャクシは水面に落下します。この種に似たアマガエルはひと回り以上小さく、目の横に筋があることで区別できます。

イワナ (サケ目サケ科) 大きさ 30 ~ 50cm



水の冷たいきれいな流れを好み、蛇谷では1年中見られる魚です。流れに逆らいながら泳ぎ、その様子は橋の上からも観察できます。主に川の中にいる水生昆虫を食べていますが、時にはカエルやサンショウウオも食べることがあります。同じ川にすんでいても、1匹ずつ模様が違ってきます。

カジカ (カサゴ目カジカ科) 大きさ 10 ~ 15cm



イワナと同じく水のきれいな溪流にすみ、蛇谷でも1年中見られます。イワナと違って川底の岩や石のすき間にひそんでいることが多く、流れてきた水生昆虫などを大きな口で食べています。白っぽい個体や黒っぽい個体など、体色や模様は1匹ずつ違います。石川県では「ゴリ」とよばれ、佃煮や唐揚げなどにして食されます。

ルイスアシナガオトシブミ (コウチュウ目オトシブミ科) 大きさ 5 ~ 6mm



主に森林にすんでいます。展示館では前に植えてあるケヤキの木の下に、5~6月頃には木の下にこのオトシブミがつくった揺籃がたくさん落ちて見られます。揺籃とはゆりかごという意味で、オトシブミは若葉を巻いてその中に卵を産み、幼虫はその葉を食べて育ちます。成虫は木の上にいるようであり見られません。



揺籃

ミヤマクワガタ (コウチュウ目クワガタムシ科) 大きさ 30~75mm



山地森林に生息し、観察路では7月から8月にかけてミズナラの樹液に来ているところを観察できます。角のように見える部分は口の大あごが変化したもので、その大きさは個体により差があります。夜にはガなどとともに灯りに集まってきます。展示館周辺には、コクワガタやアカアシクワガタも生息しています。

ミヤマカラスアゲハ (チョウ目アゲハチョウ科) 大きさ 40~75mm



森林に生息する大型のチョウで、展示館周辺では林の縁を飛んでいる様子をよく見かけます。体は青緑色に輝きとても美しく、ツツジ、アザミ、クサギなどの花に集まるほか、オスが地面からしみ出た水を吸っていることもあります。近縁のカラスアゲハとはとても似ていて、一見するだけではなかなか区別できません。

クサギカメムシ (カメムシ目カメムシ科) 大きさ 15mm



夏は林の縁や林内に生息し、様々な植物の汁を針のような口で吸っています。10月頃からは、建物に侵入して越冬するために、展示館内外で非常に多く見られるようになります。刺激を受けると強烈な悪臭を放ちます。秋にはオオトビサシガメ、ハサミツノカメムシ、ツノアオカメムシなどの近縁種も観察できます。

サワガニ (エビ目サワガニ科) 大きさ 50~70mm



水のきれいな小川に多く、中宮では観察路にある小さな沢や水たまりでよく見られるカニです。一生を川などの淡水で過ごします。日中は石の下に潜み、夜になると活動を始めますが、雨の日は日中に沢から離れたところで見かけることもあります。藻類などの他、昆虫、ミミズなど何でも食べます。

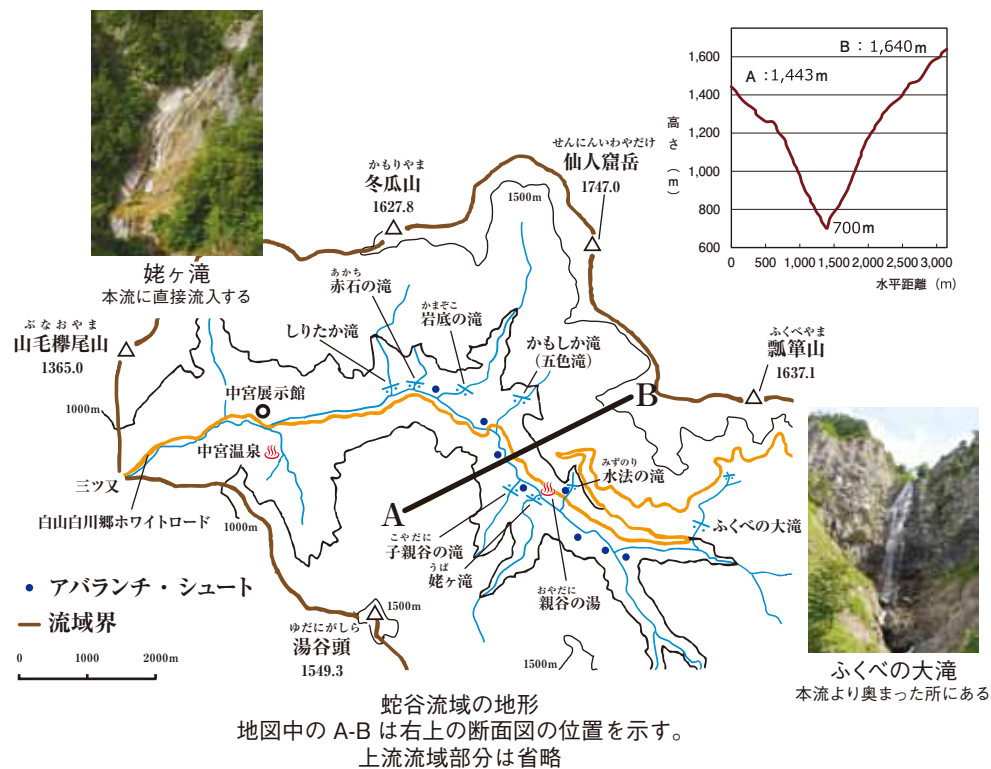
地形と気象

中宮展示館の位置する蛇谷地域は、地形が険しい上に冬期間雪崩が頻繁に発生するなど自然条件の厳しいところですが、かつては人々がほとんど訪れることもなく、手つかずの自然が多く残された場所でした。

V字谷

蛇谷の流域面積は約49km²、最低点は三ツ叉で標高約550m、最高点は間名古の頭付近の約2,040mで、標高差は1,500m近くあります。谷の横断面はV字型をなし、場所によって谷底から尾根までその深さ(比高差)は900m以上にもなり、深い急峻な谷の続くV字谷になっています。

この地域の地質は火山起源の濃飛流紋岩類(約6,500万年前に噴出)に属する硬い凝灰岩が主であり、当地では、山地の隆起とともに、川は底を深く削りますが、



硬い地質の影響もあり谷幅が広がるような働きが抑えられ、今日のような深くて急峻な谷になりました。

中宮展示館はこの蛇谷の下流部のわずかな谷底部に位置しています。

滝

蛇谷を特徴づけるものにいくつもの滝があり、変化に富んだ景観に花を添えています。

滝は二つのタイプにわかれています。一つは滝の傾斜が垂直に近く、水はそのまま落下して流れ、その位置も本流より奥まった場所にあるもので、「ふくべの大滝」や「しりたかの滝」がこれにあたります。もう一つは、滝の傾斜が前者よりも緩く、水は斜面の上を流れ下りながら、直接本流に流れるもので、「姥ヶ滝」や「赤石の滝」がこれにあたります。

「ふくべの大滝」や「しりたかの滝」は、凝灰岩に加えて火山角礫岩からなります。この岩はブロックのかたまりとなって崩れていくので、滝は垂直な断面となり、これが繰り返されることで滝が後退し落差も大きくなりました。

これに対して、「姥ヶ滝」や「赤石の滝」は凝灰岩がからなります。もともと火山灰からなるこの岩は表面から徐々に削られていくので、水は滝の表面を流れ、水が垂直に落下するほど急にはなりません。

アバランチ・シュート

蛇谷を特徴づけるものが、滝以外にもうひとつあります。蛇谷の斜面の岩肌を良く見ると、断面が丸く窪んだような溝が、つらなって斜面を構成しています。場所によっては表面がつるつるしています。一般的に流水によって削られた谷の横断面は、V字型になりますが、蛇谷の岩肌は、雨樋のように浅いU字型の横断面をしています。

これをアバランチ・シュート (avalanche chute) といいます。アバランチは雪崩、シュートは溝のことです。雪崩などが繰り返し起こることによってできる独特の地形です。斜面に堆積した雪は、グライドと呼ばれるゆっくりとした雪の滑動や



アバランチ・シュート

雪崩となって植生をはぎとります。さらに雪崩はむき出しとなった岩肌から岩片をはぎとり、その岩片がまた岩肌を削ります。これが繰り返されることでU字型の横断面になっていくと考えられています。

この地形は、多雪地帯である日本海側の山地に分布しており、なかでも硬い岩質のところが多く、当地域の地質もこの硬い凝灰岩であることが、この地形の発達に起因しています。アバランチ・シュートは雪崩が多く発生するところにどこでもあるわけではなく、蛇谷はこの地形が典型的に発達している場所のひとつです。

冬の蛇谷

蛇谷は冬期間、道路は通行止めとなり、人は行くことができません。積雪は例年3～4mあるといわれ、雪に閉ざされた世界となります。

中宮展示館で気温観測した結果によれば、日最低気温は-10℃を下回り、1月や2月の月平均気温が氷点下となる年もありました。

この大量の降雪と急峻な地形とが合わさり、毎年、頻繁に雪崩が発生するのが蛇谷の特徴です。地元では雪崩の多く発生する谷を「ノマ」と呼び、蛇谷の支谷にはこの名称をもつものがあります。

中宮展示館も過去にはこの雪崩の被害を何度か受け、特に1996年2月には表層雪崩の直撃を受け、建物が半壊してしまう大きな被害を受けました。

中宮展示館のある蛇谷は厳しい自然環境の中にあり、それゆえ自然の素晴らしさを感じることもできる場所なのです。



中宮展示館雪崩災害 (1996年2月)
展示館内部の被災状況



冬の中宮展示館

中宮の自然とともに生きる

季節出作り

母村を離れ山間奥地に分け入り焼畑などに従事する「出作り」は、白山麓ではぐくまれた独特の生活文化です。

石川県では牛首川上流の旧白峰村の出作りが有名ですが、尾添川流域にかけても、旧吉野谷村の中宮、旧尾口村の尾添や東荒谷を母村とし、春から秋にかけて山中に住み、冬には母村に帰る「季節出作り」がさかんに行われていました。地



蛇谷の出作り小屋

形的に急峻であるなど適地の少ない尾添川流域の出作りは経営規模が小さく、通年山中で生活する「永久出作り」は発達しませんでした。

蛇谷は尾添川流域の一番奥地にあたり、主として中宮集落の人々が居住し、焼畑でヒエ・アワの栽培、炭焼きなどを行って生活していました。

中宮展示館の蛇谷自然観察路沿いや周辺には、出作り跡が残り、かつての焼畑地や炭窯跡を見ることができます。近くの中宮温泉で働き収入を得ることもでき、



蛇谷周辺のかつての出作り地

道路などの便もよかったため、昭和30年代半ばまで出作りが行われていました。

中宮温泉

古くから湯治場として利用され、明治の中頃には旅館が開業されたとされる中宮温泉は、歴史とその効能から秘湯として親しまれています。

その発見にはふたつ

の伝承があります。ひとつは奈良時代、白山開山の祖と伝えられる泰澄大師が谷川に白鳩が憩うのを見て湧湯を見つけたというもの。もうひとつは出作り耕作を行っていた村人が、谷間にじっとうずくまる白鳩を見つけ、不思議に思ってそばへ寄ってみると、鳩の足もとからこんこんと湯が湧き出していたというものです。いずれの言い伝えにも「白鳩ありき」のくだりとなっており、別名「鳩の湯」、「鳩谷の湯」ともいわれます。



大正年間の中宮温泉
現在の中宮展示館の場所にあった

泉質は含重曹弱食塩泉で、肌に柔らかく、胃潰瘍、十二指腸潰瘍、胃カタル、腸カタル、リュウマチ、皮膚病ほかいろいろな病気に効能が認められます。特に「胃腸の霊泉」として知られており、入浴するだけでなく、飲用するとさらに効果があるといわれています。戦後しばらくは金沢大学の温泉研究所があり、その効能などについての研究も行われていました。

中宮温泉夏季分校

中宮温泉と出作り地で人々が生活している間、そこに住む子供たちのための春から秋の分校「中宮温泉夏季分校」が、開校されていました。分校は、現在の中宮展示館正面向かって左隣にありました。

生徒の数は小学校1年生から中学校3年生まで数人から多い時は10数名いました。時には入学前の幼児も親の仕事の都合でいたようです。そんな生徒たちがひとつの教室に机を並べ勉強していました。しかし、先生は一人だけだったので、授業もそこそこに、課外授業が多かったようです。学年の垣根を越えて、まるで兄弟姉妹のように仲が良かったそうです。この分校も昭和30年代には姿を消してしまいました。



中宮温泉夏季分校

中宮展示館

中宮展示館は蛇谷を中心とした白山の自然や生活文化を学べる施設です。展示を通して体験しながら楽しく学べるように、次のようなコーナーを設けています。



森に遊ぶコーナー

白山の自然をテーマに自然の不思議さを学ぶ体験型の展示コーナーです。ブナ林とそこに潜む生き物、川の生き物など、さまざまな発見や驚きに出会えます。

白山と生きるコーナー

白山麓の人々の暮らしや自然との関わり、工夫を紹介しています。昔当地にあった分校の教室を再現しています。

中宮散策ナビゲーションコーナー

中宮周辺を中心とする白山の動植物の多様性や食う、食われるという生物どうしのつながりについて学ぶことができるよう展示しています。

白山の高山帯コーナー

積雪、低温、強風などの厳しい環境条件に適応して育つ白山の高山植物について、代表的な種類を実物そっくりの模型で展示しています。

映像ホール

白山の四季や文化について、ハイビジョン映像を103インチの大画面で楽しめます。ホールには50人程度が収容できます。



白山の地質コーナー

白山の生い立ちを教えてくれるさまざまな岩石や世界的に貴重な手取層群の化石について、実物標本、復元模型、復元図などを展示しています。

おわりに

本誌では中宮展示館周辺の自然について、写真や解説を交えて紹介してきました。展示館周辺には、これ以外にもここで紹介しきれなかったたくさんの生き物がいます。観察路を散策すれば、白山の自然がさらに深く理解できるとともに、心も体もリフレッシュできること間違いなしです。土、日、祝日には白山自然ガイドボランティアの皆さんによるガイドウォークも行っています。ぜひ中宮展示館においていただき、この冊子を参考に白山の自然を満喫してください。

中宮展示館までのアクセス



中宮展示館
イメージキャラクター
“いぬわし君”

北陸自動車道

白山ICからR157号経由 75分

小松ICからR360号経由 75分

勝山ICからR157号経由 90分

中宮展示館

開館期間 5月1日～11月10日（自然状況等によって変更あり）

開館時間 9:00～16:30（開館期間中無休・無料）

〒920-2324 石川県白山市中宮オ9番地 TEL & FAX 076-256-7111

写真提供 西山喜一、外一夫（故人）

白山の自然誌 40

中宮展示館
周辺の自然

発行日 令和2年3月31日

文・構成 平松 新一・小川 弘司・南出 洋・安田 雅美

発行 石川県白山自然保護センター

〒920-2326 石川県白山市木滑ス4

Tel. 076-255-5321 Fax. 076-255-5323

<http://www.pref.ishikawa.lg.jp/hakusan/index.html>

E-mail: hakusan@pref.ishikawa.lg.jp

印刷 株式会社 中川印刷